

國學院大學學術情報リポジトリ

〔紹介〕 佐藤長門著 『蘇我大臣家：
倭王権を支えた雄族』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清武, 雄二, Kiotake, Yuji メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000285

〔紹介〕

佐藤長門著 『蘇我大臣家―倭王権を支えた雄族―』

(日本史リブレット人003)

清武雄二

本書は、六世紀から七世紀中葉において王権政治の中枢で活躍した蘇我稲目、馬子、蝦夷、入鹿の人物伝である。

蘇我氏といえは王権を私する専横なイメージが一般的であるが、近年では倭王権の文明化に貢献した開明的な氏族という評価も定着しつつある。一見すると相反する見解ではあるが、どちらも蘇我氏の政策・政治行動といった権力行使の在り方に歴史の評価を下す所論であることに違いはない。本書はこうした蘇我氏の功罪を問う議論からはひとまず距離を置いている。著

者の佐藤長門氏は、蘇我氏が立脚する権力の性格そのものに視点を定めており、蘇我氏を六・七世紀の王権構造に無理なく位置付けた「等身大」の歴史像が追求されている。

佐藤氏には、本書と同時代の王権とその権力の構造を論じた『日本古代王権の構造と展開』（吉川弘文館、二〇〇九年）という前著がある。「群臣（まえつきみ。大夫とも）」と称される王権の中枢メンバーとその合議体制の歴史的な性格を論理的に解明した著述である。はからずも本書では、佐藤氏の王権論が蘇

我氏という最も著名な氏族を素材として具体的に論じられることとなった訳である。その内容構成は以下の通りである。

大臣と合議制

① 蘇我稲目

系譜と出自／政治的台頭の背景／群臣の範
圍／仏教導入／外戚関係の形成

② 蘇我馬子

六世紀後半の王権継承／蘇我系大王の誕生
／丁未の役／壬子の変／推古女帝の推戴と

政治課題／飛鳥寺の創建／対隋外交の展開

③ 蘇我蝦夷・入鹿

推古の後継問題と蘇我氏の族長権争
い／百濟宮家と斑鳩宮家／皇極女帝

の即位／癸卯の変／乙巳の変

その後の蘇我氏

著者の視点は、序章をなす「大臣と合議制」で明確に示されている。前著で提示された六・七世紀の王権構造・合議体制が平易かつ簡潔に述べられ、群臣を構成メンバーとする合議（大臣職）と大王との外戚関係こそが蘇我氏の権力掌握にとつての車の両輪と指摘している。

冒頭では、タイトルでもある「蘇我大臣家」に言及している。

稲目以下の蘇我氏四代は一般には「蘇我本宗家」と呼称されることが多い。しかし、この表現はさしたる説明もなく使われているのが現状である。著者は、直系継承が確立していない同時代に「本宗家」は相応しくないとする一方、「大臣家」についても「家」の未成立や蘇我氏四代以外の大任職就任の事例等から正確ではないとしつつ、他に適切な表現が見当たらないので便宜上使用することを率直に表明している。

同じく、大臣についても重要な指摘がなされている。大臣は一般には「おおおみ」と訓じられ、氏族の出自を示す姓かばねのうち、臣姓おみの氏族の代表と解されている。しかし著者は、臣姓と対をなす連姓むすぢに関する近年の研究等によつて姓制度に立脚した理解を斥け、「群臣」等と表記される「臣」の代表として「おおまえつきみ」と訓じる説に賛意を示し、「臣」が構成する合議体の統括職と位置付けている。

学術用語への配慮は、厩戸王の血族を「上宮王家」ではなく「斑鳩宮家」とすること、崇峻弑逆を「壬子の變」、上宮王家滅亡事件を「癸卯の變」とすることなど随所に見られ、本書の特徴の一つといえる。新たな学術用語の設定には賛否もあろうが、歴史性や史料との関係をきつちりと説明した用語の使用は、読者を既存のイメージから解き放ち、「等身大」の歴史像を導き

出すことに大きく貢献している。こうした配慮のもと、稲目以下四代の人物伝が3章にわたって述べられている。

「①蘇我稲目」では、蘇我氏の出自・台頭に関する言及が前半部を占める。蘇我氏の出自については、百濟との関係や外戚関係など蘇我氏の特徴的な政治行動に着目した見解が多いが、本書では、おみ姓氏氏族の氏名が出自（＝本拠地）の地名に因むという他氏族と同様の出自原則を重視した整理・考察がなされている。その結果、氏名の大和国高市郡曾我を本拠地とみなし、台頭の要因を本拠地周辺の地縁に基づく渡来系集団の政治的統括と管理・運用に求めている。著者は、蘇我氏による渡来系集団の統属を群臣むらぢみの職務として位置付けており、稲目の事績である仏教受容の管轄、渡来人を率いた屯倉みやけの管理システムの導入も、群臣の職務に関わる活動としている。

蘇我氏の外戚氏族化については、群臣むらぢみとして活躍する稲目個人の政治活動の観点から論述している。従来の研究は外戚関係の形成について、臣姓おみ氏族である点や葛城氏との関係を重視する傾向にあるが、著者は姓むねによる婚姻規制を六世紀の諸事例から否定する。五世紀に外戚だった葛城氏との関係についても、所生王子の後見を果たす実力が重要として外戚の「資格」を受け継ぐような考え方を斥けており、結論としては稲目個人

の政治的力量を第一の理由にあげている。著者は「面白みはない」と自説を評しているが、蘇我氏を特別視する諸説を丁寧な否定することで稲目個人の意図と実力を浮き彫りにしており、「等身大」の稲目の歴史像の提示として説得力に富む。

なお、稲目の墳墓については、多段築墳として注目される都塚古墳に比定する説が有力であるが、著者は稲目死没時が巨大前方後円墳築造の最後の時期であることに留意し、否定的な立場をとっている。その是非は考古学による検討の進展を待つほかはないが、前方後円墳の終焉を蘇我氏の開明的性格と安易に結びつける傾向への警鐘として傾聴すべき見解であろう。

「②蘇我馬子」では、まずは敏達没後の蘇我系大王の登場と大王位をめぐる抗争が述べられる。その背景として、王族の同母集団の長子である「大兄おおい」や年齢・人格的成熟度を重視した同一世代内の人物を擁立する世代内継承といった六世紀後半の継承原理が説明されている。叙述の視点は馬子の権力掌握過程や氏族間の抗争ではなく、即位を目指す穴穂部などの王族に据えられている。ここでは、丁未の役直前に史料上から姿を消す押坂彦人大兄の行方や宅部誅殺の理由なども推察されている。史料が乏しく解釈の幅が広くとれる問題なので異論は唱えられないであろうが、諸説の論点整理が的確になされており、研究状

況を踏まえた理解を無理なく促す内容となっている。

次いで、馬子による崇峻弑逆（壬子の變）の背景が述べられる。著者は、「王殺し」を王位交替が認められない終身在位時代の王権交換の手段と位置付ける。その上で東国計略と任那復興政策に注目し、対処をあやまつた崇峻に対する支配層の危機意識の共有と馬子への幅広い支持を指摘している。

推古期の馬子については、冠位制の導入・飛鳥寺創建・対隋外交等を馬子主導の政策として紹介している。冠位制について、著者はあらたな集権的秩序の構築という観点から評価する一方、群臣層に階層分化をもたらしたことを論述している。また、王族・大臣職を枠外に置く冠位制の導入によって、馬子は首席群臣（同格）から王権代行者（別格）へと転身するが、大臣職は合議機関から乖離し、蘇我氏が孤立化・独善化する端緒となったとする。飛鳥寺の建立については、蘇我氏の関与は仏教の管掌を委託された行動として位置付けており、飛鳥寺を蘇我氏の私寺とする見解に疑問を呈している。

「③蘇我蝦夷・入鹿」では、推古没後の後継問題を通じて蝦夷の代における大臣職・群臣の権限や族長位の在り方が論じられている。著者は、群臣の合意を謀る蝦夷の行動を彼個人の政治的実力ではなく大臣権力の性格の問題として叙述する。

また、蝦夷に抗う蘇我摩理勢の言動から、族長位・大臣職が直系的世襲ではなく新大王の大臣任命によって決する不安定なものであったとしている。群臣については、推古の後継候補が事前に二名に絞られていることから、その権限は自由裁量で候補者を選べるものではなく、王族側の立候補と前大王（推古）の遺詔を前提とした範囲内に限定されることを指摘している。

皇極期については、『日本書紀』をはじめとした諸史料が伝える蘇我氏専横の記事を慎重に分析し、蘇我大臣家が滅亡に至る過程とその要因が描かれている。著者は、山背大兄の襲撃を入鹿主導ではなく、大臣蝦夷、豎王（孝徳）らによる統一作戦であったとしている。乙巳の変については、隋・唐の成立に対応する政治改革が急がれる中で、世襲觀念が強まる大臣職を中心とした権力集中を謀る蘇我大臣家が王権内で孤立を深めた結果、蘇我大臣家のみを突出させた皇極王権のレジーム自体に対する王族・群臣の異議申し立てだったと論述する。

「その後の蘇我氏」では、あらたに外戚関係の形成を目論む蘇我倉家の姿を描き、エピソードとしている。ここでは、蘇我石川麻呂が自害に追い込まれた事件を契機とする蘇我系女帝と蘇我倉家の確執など、興味深い指摘がなされている。

蘇我氏四代の歴史像を客観的・論理的に再構築した本書は、

リブレットという手頃な分量でありながら、六・七世紀の王権政治全般を概観する内容となっている。研究状況の確かな論点整理を踏まえた著者の丁寧な論述は、一般の読者のみならず研究者の要望にも応えるものであり、充実の一冊といえよう。

(A5変型判、一二二頁、山川出版社、二〇一六年五月発行、定価八〇〇円＋税)